

AR CA DIA

45

SUMMER 2010

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース

[アルカディア]



岡崎市美術博物館



春のある日、武陵の漁師が自分の小舟を操るうちに、いつのまにかさまよいこんだ見知らぬ谷間の「桃花の林」というのは、陶淵明の原作ではつぎのように叙述されていました。

岸を夾みて数百歩、中に雜樹無く、

芳しき草は鮮やかに美しく、落つる英は繽紛たり。

芳しき草は鮮やかに美しく、落つる英は繽紛たり。

「芳草鮮美、落英繽紛」とは、なんと美しい言葉遣いでしょう。「繽紛」というのは、前号にも書いたように、花びらがはらはらひらひらと舞い散る様をいう擬態語だそうです。日本の「小倉百人一首」の紀友則の名歌「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（『古今集』春下）は、まさにこの「繽紛」の気分をやまと言葉にして伝えていたのでしょう。陶淵明の作品集はすでに奈良平安時代から日本の貴族知識人の間に知られ尊重されていましたから、ひよっとすると紀友則は、「桃花源記」の桃花を桜の花に変えて、この歌を作ったのかもしれませんが。

この桃花の林が、いま漁師の小舟のいる谷川の両岸に満開で、川上に向かって数百歩も、その先までもずっとつづいているというのですね。漁師は見たことも聞いたこともなかったこの光景の美しさに心を奪われて、しばし櫓を漕ぐことさえ忘れていたのでしょうか。しかし漁師は仙人でも詩人でもない、ごく普通の庶民の一人。——やがてわれに返ると、これはへんだ、これは不思議だ、いつたいどこまで桃花の林がつづいているのか見きわめてやろう、どうせまだまだ日は高いし上流まで漕ぎのぼってみよう、と

思わずにはいられませんでした。凡人漁師としてはごく当然の反応でした。

ところで、またちよつと脇道に入らざるをえませんが、大事な疑問が一つあります。それは、なぜこの谷間には桃花満開の林がつづいていたのか、ということです。中国でも朝鮮でも日本でも大昔から松・竹・梅の三種を並べて、めでたい植物として尊んできたではないか。この三種を、あるいは梅・水仙・竹を、寒さに耐えて凛として色や香を誇る草木として讃え、「歳寒三友」という画題にまでして繰返し描きつづけてきたではありませんか。それなのになゆえにここでは梅や竹の林ではなくて、桃花の林なのか。

それに、陶淵明といえば、有名な「飲酒、其の五」に――

菊を采る 東籬の下

悠然として南山を見る

とあつたとおり、菊の花が好きだったことで定評があります。あるいはこの柴桑村の居宅の門には五本の柳を植えていたとのことで、陶淵明は中国でも日本でも長いこと「五柳先生」とも呼ばれていました。それならば、この谷川の両岸には、一面に野菊の花が群れ咲いていたとか、モネの《睡蓮》の大絵巻のようにずっと柳が緑の枝を垂れてつらなっていたとかの光景でもよかったです。それなのに、詩人はいったいなぜここに桃花の花を選んだのでしょうか。

文学作品を読むには、ときにこのようにある表現の一端所に立ちどまって、水の底をのぞきこむように、井戸の底をのぞきこむようにして、映像の由来を探り、その意味を考えてみることも大切です。ことにここでは、この桃

桃の花咲く 隠れ里の物語

館長 芳賀徹



査士標(さしひょう)《桃源図巻》1695年(部分) ※2011年春 本館「桃源郷の世界」展に出品予定

花の林が原作の「桃花源記」との題名にもなっているのですから。

答えは意外に簡単です。まず作者陶淵明は、菊や松ばかりでなく、桃の木、とくに桃の花が好きだったらしいのです。彼の作品中に桃はわずかに二回しか出てこないのですが、その一つがこの「桃花源記」であり、もう一箇所は、同じく故郷に「帰去来」後まもなく書かれた「園田の居に帰る」連作「其二」のなかの――

榆柳蔭後簷 榆と柳は後の簷を蔭い
桃李羅堂前 桃と李は堂の前に羅る

の対句です。詩人は、夏は館の裏に繁る榆や柳が葉をざわめかせるのを聞きながら、涼風のかよう窓辺に寝そべって『山海経』の世界に想いを馳せるのが大好きでした。そして春は館の前庭に桃と李の林がぼうっと淡紅や白の花をつらねるのを眺め、その遠い向うに村里がゆるやかに煙をあげ、犬の吠え声、鶏の鳴き声も聞こえてくるという田園閑居の風情を心からたのしみました。

だからこそ、梅や松竹よりも少しひなびて美しい桃の花をここの谷間にも咲かせていたのでしょう。だが、それでも、谷間の桃花林が「中に雑樹なく、芳草鮮美、落英繽紛たり」というのは、日常をこえてあまりにも美しく、なにか異様で、妖しく心を誘うものを秘めた光景なのではないでしょうか。

たしかにそうなのです。この武陵原の谷の桃花は、ただ眼前にぼつりと美しく咲いているだけではなく、その背景には、崑崙山の西王母の庭に生えている桃の樹が、三千年に一度だけ長命の仙桃を実らせるという中国神話の情景をひそめていたのでしょう。また誰もが知る『詩経』

の一篇「桃夭」の「桃の夭夭たる、灼灼たる其の華」と、嫁ぎゆく少女の若々しい姿態をことほぐ言葉も、当然思い浮かべられていたでしょう。さらには、桃の木は邪気・災厄を祓う呪術の力をもつという中国古来の根強い民間信仰も、どこかに深く宿されていたのかもしれない。

「芳草鮮美、落英繽紛」たる桃花源の桃の林は、これらの神話や古詩や伝承を底深く秘めていたのです。そして底深く秘めながらも、その呪術とも仙術とも実はもう直接にはかわりのない妖しくも美しい桃花の林として、春の日ざしの生あたたかくあふれるなかに咲きあふれ、散りつづけ、漁師を谷間の奥へ奥へと誘惑しないではなかったのです。

この桃林は岩山の洞窟のかたに住む桃源の村人たちが、漁師の官能と好奇心をよびおこして誘いこむために仕掛けたわなだったのかもしれない。漁師は誘われるままに、ついに谷川の源流にまで舟をさかのぼらせてしまいます。

(以下、次号)

『アルカディア』は本号から全ページを縦組みにすることにしました。長年これを願っていた私としてはほっとしています。日本語の文章を横書きにするというのは、日本語の千何百年かの豊かな歴史に対する暴力行為であり、日本のみならず漢字文化圏の古典的遺産に対する冒瀆にほかならないからです。紫式部や松尾芭蕉が、夏目漱石や川端康成が、それに陶淵明や杜甫、李白も、彼らの詩文を横書きなどにしたことがありますか。夢にだに考えたことはありません。それを用紙や印刷の便宜の理由だけで、平気で横倒しにしてハイカラぶってきたというのは、戦後日本人の植民地根性のあらわれであり、自己の文化にたいする横柄にして鈍感な蔑視であり、文明の基幹をゆるがす野蛮な行為でした(大体、横書きの日本語の文章というのは書きにくい、読みにくい)。長年『アルカディア』を横組みのままにしてきたことを、館長としてここに深く陳謝いたします。

ESSAY

オランダについて皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。最近ではサッカーワールドカップ南アフリカ大会の第一次リーグ戦で日本がオランダと対戦、惜敗し悔しい思いをしました。が、私にとってオランダは欧州のなかでも存在感、親近感のある国に思えます。オランダは人口約一六〇〇万人で、九州とほぼ同じくらいの大きさの国です。欧州では比較的小さな国ですが、存在感があるとともに、風車やチューリップの風景に親しみを覚えるのは私人だけではいでしょう。こうした日本人の感情は、過去の両国の交流の歴史によつて醸成されたものと思います。今回の企画展「阿蘭陀とNIPPON〜レンブラントからシーボルトまで」はまさにその両国間の交流の歴史を知っていただくものです。

日本とオランダとの最初の交流は、一六〇〇年、豊後国（現在の大分県）に漂着したオランダ船「リーフデ号」の乗組員を救助したのが始まりといわれています。その後、徳川家康が発給した貿易許可書としての「朱印状」により通商関係が始まるのが一六〇九年で、今年はおランダとの通商が始まってから四〇一年目にあたる年になるわけです。

江戸時代の日本は「鎖国」政策により、唯一通商を行った国はオランダでした。長崎の出島にはオランダ商館が置かれ、この出島で交易が行われたことはよく知られたところです。オランダとは交易のみならず、様々な情報が日本にもたらされ、オランダは日本が世界情勢を知る上での窓口となったのです。長崎に置かれたオランダ商館から奉行を通じて幕府に報告された「阿蘭陀風説書」は知られているところです。

オランダが日本に進出する前は「南蛮の時代」とよばれるように、スペイン人、ポルトガル人によるキリスト教の布教と交易が盛んでしたが、それが次第にイギリスやオランダが交易の中心となつてゆき、最終的にはオランダのみが通商の相手となります。これには、一五六八年にスペインから独立の宣言をし、一六四二年にはポルトガルからマラッカを奪取するなど十七世紀におけるオランダ勢力の台頭、また、キリスト教を禁じた幕府が布教よりも交易を重んじたオランダの姿勢を受け入れたことなどの理由があります。さらに当時のオランダがヨーロッパの情報流通の主要な発信地、集散地であったことも研究であきらかにされていますが、この認識

EXHIBITION

が幕府にあったかもしれません。

日本との通商はオランダ東インド会社（VOC）により行われましたが、東インド会社はアジア各地に拠点を持ち、日本では一六〇九年、平戸に商館が設置されますが、のちに長崎へと拠点である商館が移されます。この平戸と出島での交易は両国の生活や文化に影響を与えますが、この交流と影響は本展での最大の見所です。オランダのレンブラントは長崎出島を通じて輸出された和紙に数多くの銅版画を描き、日本の肥前陶磁器や漆器はオランダ人の間でもてはやされ、東洋趣味を生み出すきっかけとなります。日本では蘭学、蘭癖大名、洋風画などオランダ趣味や西洋志向が生まれています。オランダ商館医であったシーボルトも日蘭交流の歴史に大きな足跡を残しており、両国の絆となったひとりで、近代日本の礎を築くうえでオランダの果たした役割は大きなものがあります。本展により、私たちのオランダへの親近感は一層に深まるでしょう。



川原慶賀《シーボルト肖像画》文政年間（1818-1830）

日蘭通商400周年記念展

阿蘭陀とNIPPON

～レンブラントからシーボルトまで～

堀江登志実

会期：平成22年7月17日（土）～8月29日（日）

裏千家11代玄々斎宗室生誕200年記念

茶の湯の文明開化

—茶人玄々斎の生涯と奥殿藩松平家—

浦野加穂子



羽衣薬 玄々斎好 八代宗哲作 江戸時代 今日庵蔵

日本人の生活文化に深く浸透し、多くの人々に嗜まれている茶道。今年は裏千家十一代家元玄々斎精中宗室（二八一〇〜七七）の生誕二〇〇年にあたります。玄々斎は、幕末から明治における日本文化疲弊の時期に、茶道を通じてその復興に力を尽くし、数々の功績を残しました。なかでも千利休の時代より行われてきたものの一時中断していた禁中での献茶を復活させることによつて、古来の文物を研究し保存することの重要性を説き、明治五年には茶道の精神と意義を「茶道の源意」と題して明治政府に建白して、茶道が遊芸ではないことを明らかにしました。

その一方、明治維新後の外国文化の流入に合わせて、いち早く椅子を用いた立礼式の点前を考案し、新しい時代に即した裏千家の基礎を築くとともに、伝統を重んじる日本文化の開放性と適応性を内外にアピールしました。この相反する考え方の共存共栄こそ、玄々斎の果たした日本文化への特筆すべき貢献といえましょう。

近代黎明期の茶道界に大きな功績を残した玄々斎は、文化七年（二八一〇）三河国奥殿藩四代藩主松平乗友の子として生まれ、十歳で裏千家十代認得

EXHIBITION

斎の婿養子となりました。奥殿藩松平家は、松平四代親忠の子乗元より始まる大給松平家の分家で、大給松平五代真乗の子真次を祖とし、真次の子乗次の代に二六〇〇〇石の大名となり、大給藩が成立しました。大給藩三代乗真の代に現在の岡崎市奥殿町に陣屋を構えて奥殿藩が誕生し、その後約一五〇年にわたり奥殿を拠点として、三河に四〇〇〇石、信濃に二〇〇〇石の領地を有していました。幕末の激動期に幕府の要職を務めた八代乗眞は、藩の拠点を信州田野口（長野県佐久市）に移し、洋式の城郭である龍岡城五稜郭を築いて藩名を龍岡藩と改めました。

明治四年には廃藩となりましたが、同二年に大給恒と改名した乗眞は、その後も博愛社（後の日本赤十字社）の設立や、勲位・勲章等の栄典に関する事項をつかさどる賞勳局創設に力を尽しました。現在奥殿陣屋の跡地には陣屋の書院や本庭、資料展示室、玄々斎宗室生誕碑、歴代藩主の廟所などが整備され、公園として多くの人々に親しまれています。

玄々斎生誕二〇〇年にあたり、出身地である岡崎において開催される本展覧会では、京都・裏千家所蔵の玄々斎ゆかりの茶道具・墨蹟などの名品の数々を展示し、その事績と幕末・明治の茶を通観します。さらに奥殿藩松平家の歴史を通じて、玄々斎の原点を辿るとともに、当館所蔵の現代美術作品と裏千家所蔵の茶道具とのコラボレーションにより玄々斎から現代へと展開する新たな茶の湯の可能性を探ります。



《松平真次画像》延享2年（1745）香林院蔵

会期：平成22年9月11日（土）～11月7日（日）

集荷の旅は胸に沁みて

荒井信貴

山田昌宏《ヴィルフ》2000年

強引に周辺の草木を
なぎ倒し玄関先と横
付けするのに小一時間
のロスでした。作業を
終えあたふたと次の予
定地へと風光明媚な
霞ヶ浦を横目に南下
し、辿り着いたのが水
郷で知られる潮来市で

展覧会開催にあたり、自分自身で集荷した作品にはどうしても思入れが強くつてしまいます。特に現代美術の作品。作家と直接対話し、その制作の場を垣間見、さらには生活の匂いにもで触れてしまふ。特に平成十五年度の「現代の日」本画 その冒険者たち」展での作品借用の旅路は、そんな思いが強く感じられたものでした。旅の基点は山形で、朝名古屋からの美術輸送クルーと合流して行動開始。東北芸術工科大学のキャンパスで岡村桂三郎作品を積み込み山形・東北磐城・常磐の自動車道を乗り継ぎ、六時間かけ水戸市へ入りまた集荷。翌日は霞ヶ浦のほとりにある間島秀徳氏の住居兼アトリエに向かうものの、開発途中の狭い道に立ち往生。

す。ここで出会ったのが作家山田昌宏氏とその作品『ウィルフ』。論法鋭い論客として知られる氏ですが、その作品は繊細で内省的です。棧木により作り出される緩く張られたキャンパスの三つの凹みに作家の手で絵具が流し込まれます。水性の絵具はグラデーシヨンや滲みを醸しだしながらゆつくり時間をかけ定着を続け、作家のイメージに近づいていきます。作家の投げかける視線こそが絵筆で、時間との対話が作家の創作活動のように感じられます。このまちな見渡すと、自然により沿いゆつたりと時間が流れ、水面ではたえず色彩の微妙な変化が生まれています。この場こそが作家の心の奥底に染み付いているのではと感じながら、次の目的地埼玉県へと向かいました。

COLUMN & TOPIC

公会堂は見てる

伊藤久美子

扉を閉ざして三か月余り。朝日町にある岡崎市郷土館は、国道を行き交う車列の騒音の傍らにあつて静寂のなかにある。郷土館と呼んではいるが、建物本来の名は額田郡公ぬかた会堂と額田郡物産陳列所。岡崎市誕生より三年早く大正二年（一九一三）に現地に建てられ、今年で九十七歳。大正から昭和、そして平成へと百年近く故郷を静かに見続けてきた。その中から、少し話をしてみようかと思う。

日本が戦争をしていて、岡崎の町が空襲で燃えてしまった六十五年
前、いや、それ以前の国民に兵役義務があつた時代の間、厳しい壮丁検査（徴兵検査）の会場となつていたのがこの公会堂である。出頭命令を受けた満二十歳になる青年達がふんどしひとつ、裸同然でそれはそれは緊張して検査を受けた。検査を受けることは戦地への出発点であつたし、検査官の将校らはとても恐ろしかった。それに大勢の立会人も居る前で、裸を見られることは、今よりずっと恥ずかしいと考えられていた時代であつた。検査のためやつて来る人と公会堂へは正面玄関でなく、通



額田郡公会堂

用玄関から入るよう指示された。出頭してきた庶民は、飾手摺でバルコニー風に仕立てられている洒落た玄関ポーチから入ることは許されなかったのだ。

この玄関飾りのおかげで、郷土館時代、建物は二階建てと錯覚されたし、バルコニーに上がる階段を尋ねる人もよく居たものだ。実際、内部に階段などない。外から梯子を掛けてよじ登るしかないのである。しばらくこの玄関から入って貰うことはできないが、玄関ポーチに立つことはできる。一度、下から見上げてはいかが、かな。



弥次さん



喜多さんが行く

稲垣満春

初夏を思わせる六月九日、やさしいミュージアム講座「東海道を歩く」が開催されました。今年の講座は、五回にわたり市内に残る東海道の史跡を歩こうというのですが、その第一回目は、安城市の大浜茶屋から矢作橋までの四キロほどのコースです。運動不足で歩くのが億劫になつてゐるという弥次さんこと堀江学芸員と、メタボ予防にとウォーキングをはじめた喜多さんこと稲垣学芸員の案内のもと、三十四名の参加者は美術博物館からバスに乗り、スタートとなる安城市大浜茶屋へと向かいました。東海道の詳しい弥次さんによると、大浜茶屋に関しておもしろい記録が残されているという。江戸時代、旅人の宿泊は宿場と決められていたが、岡崎と池鯉鮒の宿場の間に位置していた大浜茶屋村が旅人を宿泊させているとして、隣接する宇頭茶屋村が大浜茶屋村に抗議をしたという記録だそうだが（東海道をウォーキングしている喜多さんもそれは知らなかった）。大浜茶屋でバスを降りた一行は、旧東海道沿いに残る一里塚跡、松並木など往時の東海道を偲ばせる史跡を

大浜茶屋から矢作橋へ — やさしいミュージアム講座「東海道を歩く」 —



弥次さんの説明を受けながら散策。国道一号線になつてしまつた部分をバスで移動し、矢作町に入ったあたりでバスを降り、再び旧東海道をウォーキング。恵心僧都が長徳三年（九九七）に建立したと伝えられ、瑠璃姫の墓が残る誓願寺や、家康の子信康にかかわる遺品を数多く保存している勝蓮寺を訪ね、ドイツ人医師シーボルトも渡つたとされる矢作橋を渡り、参加者全員がゴールとなつた岡崎駅からバスに乗り、美術博物館へと帰館しました。バスの中では弥次さんはちよつと疲れた様子でしたが（喜多さんはもつと歩き疲れた）、とにかく全員が元気で帰つてくることができました。ありがとうございました。

COLUMN & TOPIC

『長嶋家御用日記』刊行

岡崎市ではこのたび市史料叢書として『長嶋家御用日記』を刊行します。江戸時代の碧海郡中之郷村で岡崎藩堤通手永（現在の六ツ美地区）の大庄屋を勤めた長嶋家が書き留めた記録を翻刻したものです。出版に関わつた者として、まず刊行までこぎつけることができてほつとしています。本の体裁はB5判で、頁数は二〇〇頁に及び、手にしたときの本の厚みと重量感には驚きがあります。限られた費用のなかで、なるべく原資料の形を崩さずに、また少しでも多くの資料を掲載したいと欲張つた結果がこれです。

江戸時代は、文字によって支配や行動の根拠が示される社会です。大庄屋だつた長嶋家は、藩・幕府からの触れや、配下の二十五か村から上げられる要望書などを漏らさず写していますが、これが長嶋家御用日記の原点となっています。とにかくコピーして保存することが求められたのです。こうした大庄屋の努力により残された記録を減ずることなく、ありのままに伝えたいという想いを本の体裁からも知っていただきたいと思います。販売は七月二十一日から、当館および市役所文化国際課で行います。（堀）

7/21
発売



価格 4,500円（税込・送料別）

編集後記 | この度『アルカディア』をリニューアルしました。日本語の文章が持つリズムや力を充分に発揮するには、やはり縦書きではないでしょうか。“新”アルカディアでは、皆さんに文章自体を味わっていただき、また、当館の活動や美術・博物の情報だけでなく、私たち職員のにひつかった幅広い文化情報を、それぞれの目線を通してお届けできるように努めてまいります。（〒）

INFORMATION

日蘭通商400周年記念展

阿蘭陀とNIPPON ～レンブラントからシーボルトまで～

7月17日(土)～8月29日(日)

■講演会

7月18日(日)「江戸時代の日本とオランダ」

松井洋子 (東京大学史料編纂所教授)

7月24日(土)「日蘭交流のなかの人物―ケンペルからカッテンディーケへ」

芳賀徹 (当館長)

8月8日(日)「異文化理解としての川原慶賀―シーボルトの眼になった絵師―」

小林淳一 (江戸東京博物館副館長)

8月22日(日)「考古資料からみた日蘭交流」

小林克 (江戸東京たてもの園園長)

※いずれも午後2時から

裏千家11代玄々斎宗室生誕200年記念

茶の湯の文明開化 ―茶人玄々斎の生涯と奥殿藩松平家―

9月11日(土)～11月7日(日)

■講演会

9月11日(土)「奥殿藩松平家と玄々斎」

鵬雲斎千玄室大宗匠 (裏千家前家元、財団法人今日庵茶道資料館長)

※午前11時から *会場は、岡崎市役所福祉会館6階ホールとなります。

9月26日(日)「玄々斎故地(ゆかり)三河奥殿藩事情」

尾崎行也(佐久市白田町誌編纂委員長)

10月30日(土)「茶の湯の文明開化」

筒井紘一(財団法人今日庵茶道資料館副館長)

※いずれも午後2時から

■茶道講座

10月11日(月・祝)「玄々斎の茶道具」

橘倫子(財団法人今日庵茶道資料館学芸員)

※午後2時から

■サタデーナイト・シアター「コメディ万歳!」

8月14日(土)「ぐうたらパンザイ!」(1967年/フランス/92分)

9月11日(土)「トンマッコルへようこそ」(2005年/韓国/132分)

※いずれも午後6時から

8月に上映するのは、何ともふざけたタイトルの「ぐうたらパンザイ!」。“ぐうたら”のアレクサンドルは、毎日、妻に尻を叩かれながらせっせとお仕事。ところが妻が突然の事故死。ひどいもので、アレクサンドルは、悲しむどころか誰にも何も命令されない日々を謳歌し始めます。相棒の犬にお遣いをさせ、自分はベッドで一日過ごす始末。何にもしられない自由な姿は羨ましくもあり、人生の楽しさについて考えてしまいます。VIVA!ぐうたら人生です。

9月に上映するのは、「トンマッコルへようこそ」。現代の桃源郷とも言うべきトンマッコル村に迷い込んだ敵対する3組の軍人たち。彼らはアメリカ軍の侵攻を聞きつけると、村を守るために一致団結します。コメディとしてご紹介するには少々気の引ける「反戦映画」ですが、軍人たちが次第に打ち解けていく場面には、多くの笑いが散りばめられています。笑いがあるからこそ戦争の虚しさが胸に響く。コメディの底力が感じられる作品です。

*その他イベントも開催予定。詳細は展覧会チラシ、当館HPをご覧ください。

癒しの「粹外? 学芸員」

毎年四半ばを過ぎる頃になると学芸員室南側テラスにツバメがやって来る。「今年も来てくれるかな?」。外の鳥の声が気にかかる季節、やつぱり来てくれた。最初は「羽、そしてもう一羽」。

夫婦かな?可愛らしい姿にしばし目を留め、巣作り・子育てを期待して観察してみることにする。テラスには昨年の巣が二つ残っていたが、その中に入る様子もなく、新たに巣作りを始める様子も無い。「中古住宅のリサイクルホーム」では嫌なのかな?昨年の古い巣を撤去することにした。考

えが的中。間もなく二羽での巣作りが始まった。土と草を口ばしに蓄え忙しく飛び交う二羽のツバメ。巣の上部周りは頑丈に補強し、全体はバランスよく綺麗に整えられている。口ばしだけで作った素晴らしい芸術品。一週間程で完成したマイホームで子育てが始まった。

六月半ば、雛が孵つたらしいが姿はまだ見えない。六月下旬、仕事の合間にふと目を向けると口を開けて親ツバメから餌をもらっている四羽の子ツバメの可愛い姿。巣に近づくと「蛇(青大将)」を撃退してくれる勇敢な?女子職員に守られながら、巣立ちまで、私たちをいやすしてくれるだろう粹外学芸員「ツバメ」。(近)

おしゃべり、あれこれ。

完璧な絵に似た

♪カラौरIIのつてゝ、

買いものにでかけたら♪このCMソングを覚えていたのだろうか。メディアへの露出が目立った音楽活動がしばらくなかった小沢健二が、ついに私たちの前へ現れた。今年五月から、全国ツアー「ひふみよ」を開催。十三年振りとなった待望のコンサートは、94〜96年に発表された楽曲を中心に構成され、全国十五ヶ所を飛び回り、オザケンファンを狂喜させた。

口承文芸学者の父と心理学者の母を持ち、叔父は世界的指揮者小澤征爾という文化人家系のなかで育つた彼は、東京大学在学中からシンガーソングライターとして活躍。そして90年代はじめ、J・POPの新たなカテゴリー「渋谷系」を代表するアーティストとなった。なぜオザケンがカリスマと成り得たのか。それは、彼の作る音楽がオシャレなものとして同世代の若者から広く支持され、大衆音楽となったからだ。その後、彼は過去を否定し、大衆音楽から離れていったかに見えた。しかし、それは間違っていた。大衆車であるカラौरIIのつて、再び私たちの前へ現れた。サビることのない往年のヒット曲を口ずさみながら。(澤)

私的プチ文化情報

表紙図版：広渡湖秀筆《蘭船図》18世紀後半



開館時間 午前10時～午後5時(6月～9月は午後6時まで)
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

〔岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア〕第45号 2010年7月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA